



東京医科歯科大学の上阪等准教授などの研究グループは、細胞の増殖を抑える抗がん剤として開発され、以前、臨床試験で患者に使われた「サイクリン依存性キナーゼ阻害薬」に着目しました。実験では、人工的にリウマチを起こしたマウスに10日間、毎日この薬を飲ませたところ、関節の症状が抑えられ、飲ませなかったマウスは骨が削られるように細くなって症状が進んだということです。関節リウマチは、みずからの免疫作用によって手足などの関節にある「滑膜」の細胞が異常に増殖し痛みや骨の変形が起きる病気で、国内の患者は60万人に上るとみられています。今ある関節リウマチの薬は、主に免疫の働きを抑えることで症状を改善しますが、病気に対する抵抗力が落ちてしまうことが問題となっていました。今回の薬は免疫を抑える作用はなく、滑膜細胞の増殖を抑えることで症状を改善しているとみられています。リウマチに詳しい国立病院機構相模原病院の當間重人医師は「滑膜細胞の増殖を抑えることを目的とした薬はこれまでにない新しいものだ。別の薬と組み合わせることで、より多くの患者の治療に役立つ可能性がある」と話しています。

NHK ニュース 2008年1月26日 7時16分